

## 『哲学詩集』 第一回

トンマーゾ・カンパネッラ著

澤井繁男 訳

訳者まえがき

『哲学詩集』は『幾篇かの哲学詩の選集 *Setta d'alcune poesie filosofiche*』の略である。全八十九篇からなり、カンパネッラの信奉者である、サクソニアの人文主義者トビア・アダミによって、ドイツの某所で、偽名 (Settimontano Squilla—「七番目の山の小さな鐘」の意) で出版された。カンパネッラは普通名詞で「小さな鐘」の意味であり、彼の頭に七つの不吉な瘤があったことや、代表作『太陽の都』が七つの環状で成っていることから、意味的もじりであることがわかる。出版年は一六二二年である。獄中 (カンパネッラは、革命蜂起の主謀者として、一五九九—一六二六年までの二十七年間投獄の身であった) で詩稿をアダミに手わたす際、カンパネッラ自身、詩の解説をアダミに口述筆記させている。

さまざまなテーマがまじりあっているが、究極的にカンパネッラの世界観を体系的にうかがい知ることができる。

それらは一篇の詩の中にそれぞれ詠み込まれていて、採り当てるのもひとつの醍醐味である。全篇、彼が獄中でもたえず詩作を続けてきた営為の結晶と言えよう。カンパネッタ研究家の筆頭であるルイジ・フィルポは、「末期ルネサンスの核心」に位置する「体系化された人智の体現」と高く評価している。

ソネットあり、カンツォーネあり、マドリガーレあり、長詩ありで、多彩である。翻訳に際しては、カンパネッタの思想・想念そして、なによりも詩心が明確に読み手に伝わるよう、多少の補筆も辞さずに進めていく。テキストは、すゞて、Tommaso Campanella, *Poesie* a cura di Giovanni Gentile, Sansoni, Firenze 1939 / *Tommaso Campanella, a cura di Lina Bolzini*, U.T.E.T. 1977 を用いる。

各訳詩には〈解題〉を付してある。カンパネッタ自身の解説と編者の注釈、それに訳者自身の所見・解釈をまじえて記していく。諒とされたい。

## 1 序

ぼくは永遠の知性と叡知から生を受けた、

真、善、美を愛する点では人後に落ちない、

乱れた世の中を正さんと反乱を企てたぼくだが、

母の乳を再び、と願う。

母はぼくを育て、夫を敬い、

新約・旧約を問わず聖書をわかりやすく、簡潔に、

かつ奥深く教えてくれた、

いまいろいろと聖書について思いめぐらせるのも母のおかげである。

全世界のひとたちがぼくの家と同じなら、

友よ、人間の叙した書物を棄てよ、

長さや重さや広さの単位を記しているにすぎないのだから。

人間の言葉が事物の本質を言い当てられないとすれば、

友の苦しみ、傲慢、無知を、

ぼくが太陽から盗んだ火で焼却してやろう。

#### 〈解題〉

『哲学詩集』の出版は、「訳者まえがき」にも記したように、獄中のカンパネッラの著作品のほとんどをドイツで上梓してくれたトビア・アダミ（一六四三年没）の尽力による。この「序」は刊行のめどがついたときに詩集全体の緒言を飾るものとして、カンパネッラが口述したものをトビア・アダミが書き留めたと思われる。したがってカンパネッラの哲学的考察や詩作のモチーフが凝縮されたソネットとなっている。

「序」の最後に書かれている「太陽から盗んだ火」というのは、言うまでもなく、プロメテウスの神話を下敷きにしている。人間に火を与えるために太陽神から火を盗んだプロメテウスを、ゼウスが怒ってコーカサス山に鎖で縛りつけた逸話である。カンパネッラ自身も、一五九九年の革命蜂起で失敗し、ナポリのカステル・ヌオーヴォ（新城）に軟禁されていた。「序」では、〈火〉が、苦・傲慢・無知を燃え尽くすと述べられているところから、カンパネッラの喩と見てよいであろう。つまり、知の百科全書的有機性の回復、政治と宗教界の革新と刷新に不可分な要素として、

浄化の意味で〈火〉を用いている。

一六〇七年、カステル・ヌオーヴォからサン・テルモ城に移管されていたカンパネッラは、友人に、自分はプロメテウスのようにコーカサス山に拘束されているが、それは自分に課せられた責務を果たしていないからだ、と書き送っている。カンパネッラが抱いている使命とは、キリスト教各派の融和を成し遂げることにある。

第三連目のなかの「人間の叙した書物」は原詩では *le seconde scuola*、「第二番目の学び舎」の意味で、〈自然という神が書いた書〉でなく、〈人間の手による書〉を指し、それを批判している。カンパネッラの根本的思想に、第一の書とは〈自然こそ神の書〉という考えがあり、聖書こそがそれを具現している。

## 2 詩人たちに訴える

優れた人間には思い上がりがはびこり、

健全な人物は猫を被り、

真心には虚妄が巢食っている、

思慮分別のあるひとさえ揚げ足取りに忙しく、愛は盲目と化し、

美は美として結実しない。

詩人たちよ、あなたたちは表面だけ英雄を気取り、

恥ずべき蛮勇、虚言や愚行を謳っている、

太古のように、神の威徳・神秘・偉大を詠じもせずに。

あなたたちの愚作など自然の驚異に優るはずがない。

甘ったれた詩を書いても、

自然が真偽のべつを見抜いてしまう。

ただひとつ認めうる物語は、

嘘の歴史を包み隠さず、

悪徳には武を用いてひとびとを立ち向かわせる作品だけである。

#### 〈解題〉

一五九六年、二十八歳のカンパネッラは『詩論 *Poetica*』を書いている。この詩は『詩論』で主張している彼の道徳的・哲学的基本理念を力強く綴った作と言える。『詩論』は、「詩とは何か」に始まって、「詩的雄弁術」に及ぶ、全二十五章から成る興味深い、イタリア語による論考である（ラテン語による『詩論』もあって、こちらはもっぱらアリストテレスの『詩学』の批評である。両者ともに、一九四四年、ルイジ・フィルポが編纂した版で世に出、訳者は古書店で幸運にも入手できた）。アリストテレスの『詩学』がイタリア語に訳出されたのが一五四九年のことであり、カンパネッラは当然読んでいたにちがいない。

一読してわかると思うが、当時（十六世紀後半）の詩人たちの体たらくぶりを批判している。『哲学詩集』のなかには、「ギリシアの寓話の詩作にはげむイタリア人を嘆く」（36）というタイトルの詩もあって、カンパネッラがギリシア神話を下敷きに詩作する当時の風潮を難詰し、キリスト教の賢者や立法者、戦士たちの歴史的勇猛をそれに対峙させている。

ギリシア神話を素材に詩作をした代表的詩人は、ナポリ出身で、カンパネッラより一年あとに生まれた、ジャンバ

ツテイスタ・マリノー（一五六九—一六二五年）であるが、頭角を現わすのは十七世紀に入ってからである。それにしては当時の詩人たちの作品が、嘘言で徳性を捏造し、美德をまとわせて悪徳を飾り立てていることに、カンパネッラは太古の詩作に還つて自然という作品の素晴らしさを見直せと訴えている。

カンパネッラが認める作り話とは、第四連にあるような歴史的意義を持ちえる話であつて、物語（創作）と歴史をはつきり区別しているアリストテレス（『詩学』第九章）とは立場を異にしている。つまりカンパネッラは創作（詩、物語）と歴史に差異を認めていない。ただ、あえて相違点を挙げるとすれば創作には雄弁が必須であると述べている（『詩論』第五章「歴史と詩」）。

### 3 真なる賢者の生来の信仰

ぼくは、神、力、知、愛、

大いなる生、真実、善、

第一の存在、存在の王、つまり創造主を信ずる。

創造主は部分でも全体でもなく、刻まれたりも延びたりもしない。

しかも主はあらゆるものの全体であり、

万物は徳と愛と知を分かち合っている。

主の時間には前も後も外もなく、過てる目的に道草を食っていないければ、

思慮深い魂は進みうる（というのも、活力と時間と場があるところ、主の力は無限だからだ）。

主によって、主のために、主の裡で、

計り知れない空間と存在が確立される。

主はそのために手を差し伸べて下さらない。

統一と精髓の淵源は主にある。

けれど、事物には数と差異があつて、

それらは以前とちがって無からほくたちに委ねられた。

憎しみがなければ、決闘、暴動、

罪悪、死は生まれぬ。

その次に主は封印を解き、ほくたちを蘇らせる、

無限の運命、必然、出来事、調和を共有しながら、

神はその御座を移しつつ

感化を及ぼす。

あらゆることが成就し、他のこともうまくいくとき、

相違点も失せ、何事も起きなくなった折りに、

事がふたたび始まる。

永遠を運命づける意志や知恵を見つめるにつけ、

善かれ悪しかれ、変化の兆しはなく、

死をのみ感じ取っている。

先頭の者の眼前により小さな善を握え、

続けて法を設ける。

罪の主因とは何か。

罪を犯すことは眞実をゆがめることに等しい。

結果だけに目を向けると善をみだりに使うこととなる。

罪深い行為からは犯した人物の欠陥がうかがえて、結果は二の次だ。

力は形而上学プリマリアのなかの三原理のうちのひとつである。

身振り手振りでその存在が拡がる。神の力のいたらぬところでは、

神なくしては無力であつて、あたかも犯罪に手を染めるが如しである。

自然発生的な必然は意思の裡にある。だが、暴力的なものは行為や忍耐の内奥に見出せる。つまり、意思だけが自由なのはほかでもない、神のみが意思に甘美を見て取っているからだ。

罪悪は父親から子供にもたらされる。

善を生み出す際に設計図は不要だ。

教育をなおざりにすると後遺症は大きい。

共和国から君主国へと降りて来る罪と罰で、

その時と場について人間は用意を怠つたので、

それに見合つた芽吹きを得ていない。

他の罰に關しては各自のおのが受け継いでゆき、

無知や無能はその件を非とはみなしてはおらず、

かえって意欲のほうが悪のなかでは役に立たないとされている。

裏切り者から背徳者へと審判は下る。

君主はわれら男たちの種である

少女たちをかくまうことだろう。

驚くべきことに、必要性和意欲には、意識が宿らないことはなく、

純一なる神は、ときに休息し、その場に

子なる者を召し出させる。

かくして恩寵に目をくれずとも、

自然法を守る場では、

天国の存在を否定しはしない。

ぼくは生きる、死にはしない。万物の象徴たる主は部分から成り立っているのではないし、全能でもない。理性的に真なる神を告げるひとにとっては、無知という言葉はもはや通じない。秘蹟を受けるにも値しない。苦渋に耐えて未来を見つめ来訪するひとに対して、われわれの過ちや傷口あやまを見せると心が動くようなのだ。

あたかも歴史をなべて体験するが如くに。

知恵者に対する詭弁者、善人に対する偽善者、実力者に挑む僭主を、形而上学的君主は愛さない。

最悪の偽造者に対しては、欺瞞の根を断ち切るのだ。

あなたたちはひとりでも眼高手低がんとうしひの立場を取る。

父なる神から赤子まで「創世記」では蛇であり、  
似姿であり、仔牛であった。

次に巡礼者に目を向けると己の意識と向き合い、  
矢が飛ぶこと、鳥もそうであることは言うまでもない、  
神、御みずからが、聖的存在であられる。

聖書では、エズラの

寄木細工の学舎を失った、

……………原典、一行、脱落……………

まさにパリサイ派のひとたち、タタールのひとびとが論難するには、  
阿弥陀仏信仰の腐敗と背徳性による。

地球の裏側に当たる地域が終焉を迎えることだろう。

真実の法の条件は

腐敗の逆だが、人為の本質は、

法のそれをしので凋落している。

学問にはみな関心を寄せており、

秘蹟を過って用いるなかれ。

誤謬なる光度と尺度を破棄されよ。

神が生ける像、雅みやびな方となるために、

太陽、星辰、選ばれし者を称え、  
ともに集つてゐる神を寿げ。

このように空しいものから神にいたるまで、  
学舎や王国が並び立つ。ともに生きながら、  
神に仕えること、それは人間精神の自由である。

聖なる教会、第一の叡智は師を介して存在する、  
そして神によって書かれた図書が世界を成り立たせており、  
諸々の概念を理解するに及ぶ。

七つの秘蹟はもう消えたけれども、  
宇宙のすべての謎は解き明かされるだろう、  
回転する地球という生ける神殿にて。

神、万有、世界に対する悪は押しつけられよう、  
しかし世界の諸部分は相互に異なっているが、  
万物や芽吹き始めた諸部分に向かつてそれらは微笑みかける。

森羅万象、みな一定の傾きを以て不死であり、  
いのちを恵む太陽は不透明、もしくは光輝の威に則つて、  
東から西へ、西から東へと往つたり来つたりしている。

かくの如き固有な回転を終えたと、

選ばれた諸々の精神が、運命によって秩序づけられた一定の苦難を、その道筋にしたがって乗り越えてゆく。

そして、大いなる審判の日を待つこととなる。

〈解題〉

全部で一〇二行に及ぶ長詩である。表題が「真なる賢者の生来の信仰」だから、究極的に「信仰」のことを思量している詩と見て間違いはあるまい。この「生来の」の原語は、*Naturale* だから、「本来の」と訳してもよいであろう。第一連目の「ぼくは……創造者を信ずる」にこの詩の主題は凝縮されていよう。

のこりの部分は、いずれもその余滴に相当すると付度される。カンパネッラの抱く三つの「基本原理」である「ブリマリタ（愛、知、力）」も登場しており、彼がよほどこの原理を尊崇していたかがわかる。「悪」、「罪」、「罰」も謳われていて、作者の抱く倫理的な面もうかがえて考えさせられる。なお、エズラとは前五世紀のユダヤの律法学者である。

ソネットでは堪能出来ない、滔々と流れる大河の如き味わいを宿した詩と言えよう。

4 世界とその諸部分について

世界は巨大にして完璧な生き物で、  
神が称え、生き写しとした御姿である、

ぼくたち人間は欠陥ある虫で、

卑しい種子たねである、

世界という腹の中で生まれ、

寄生虫と化している。

神の愛と知を蔑ないがしろにすれば、腹のなかの虫は己を知ろうと努めず、詭弁を弄するにいたるので、

世界に対して畏敬の念を抱かねばならない。

大宇宙のなかの大きな生物である地球に人間は棲すんでいるが、からだにわくシラミにも似て、ぼくたちは苦を受ける身である。

傲おごれる者たちよ、ぼくといつしよに目を上げて、

この世に在る生命体が見ないかに貴重かを計れ、

そして世界のどの部分に属しているか学ぶがよい。

#### 〈解題〉

作中の、「世界」、「人間（の腹）」、「寄生」虫——これらはカンパネッラの作品（たとえば『太陽の都市』や『事物の感覚と魔術』）によく出てくる発想・表現であり、人間の微少性を述べているが、微少なる神として在ることも暗に述べている（マクロコスモスとミクロコスモスの照応）。それゆえ、世界のなかで人間みずから置かれた位置を確認し、普遍的理性や人間の矮少さをきちんとわきまえ、単なる小獣にすぎぬことを知悉した上で、謙虚たれと主張している。

また、「生き物」、「生物」、「生命体」は、「animal」「animale」「ente」の訳語であるが、こうした単語を用いて詩作するのもカンパネッラらしく、彼の汎生命・汎感覺的思想及び、有機体的発想がうかがえる。

## 5 靈魂の不滅

拳こぶしのなかに脳はおさまるほどに小さいけれど、ぼくは書物をむさぼり読んでいる。

この世にはたくさん本があるのに、ぼくの知識欲を満たすにはいたらない。どれほど読みあさったことか！ 読書せずば心は闇である！

アリストアルコスやメトロドロスから、偉大なる世界についての營養を授かったが、さらに知りたくなるばかりである。

教えを乞い求め各地をへめぐったが、知れば知るほどその分わからなくなる。

だからぼくは無限なる父を想うのだ。

魚が海にいるかの如く、

神はぼくたちを包んでくれており、

熱情的な感覺そのものなのである。

三段論法で矢は的を射るであろうが、それは他の力が成しとげているにすぎない。

ぼくには、神とひとつになり、

神に満ちているひとだけが、

信ずるに値し法悦をもたらししてくれると思われる。

〈解題〉

カンパネツラの知的好奇心がいかに強烈なものであつたかを端的に示すソネットである。タイトルである「靈魂の不滅」の「靈魂」とは不死であつて無限性を有すると思われるが、その理由として知的欲求を司るのが靈魂だからである。したがつて、無限なる神によつて靈魂が生じることを述べている。人為の三段論法でも所与の知識を得ることができようが、そうした知は味気ない漠然としたもので、第四連によれば、神と一体化して神に満ちあふれているひところ最良・最善だということになる。

「ひとつになる s'Unia」は、ダンテ『神曲』の〈天国篇〉第九歌七十三行目にあり、「神に」満ちている 'inching' は、〈地獄篇〉第八歌四十五行目で登場する。カンパネツラはこの二語を自覚的に用いることで、神の炯眼や洞察力を強調している。その神が、第三連にあるように人間の「感覚そのもの」なのである。

カンパネツラは、著書『形而上学』（一六三三年刊）のなかで、神を知ることが自意識と自由意志の基部（奥底）で行なわれていて、人間以外の生物もそれは同様であり、神の愛が全存在物の原理である、と論じている。

つまり、（神を感得する）感覚のなかにだけ、主観と客観が直載的に結び合わさっているわけである。人為的な論証や認識はむなしなのだ。

アリストアルコスは、サモスのアリストアルコス（前三〇一頃―前二三〇年）のことで、地動説を唱え、コペルニクスの先駆者である。カンパネツラは「アリストアルコス小論」（現存せず）を書いて、その説を『物質の哲学』（一六二三年刊）で紹介している。メトロドロロス（前三三〇頃―前二七八・二七七年）は、エピクロス（前三四二頃―前二七〇年頃）の弟子で、無限なる宇宙に複数の世界があるという説をはじめとする師の諸説（快樂主義、唯物論）を信奉した。

「各地をめぐった」と第二連にあるが、二十七年間の獄中生活に入る前に、北イタリアのパドヴァまで足をのばし、ガリレイと親交を結んでいる（一五九二年、カンパネッラ二十四歳、ガリレイ二十八歳）のが、最適な例であろう。

## 6 哲学の方法

世界は永遠の叡智が固有の思念を記す書物である。

世界とは生きている神殿で、

そこには永遠の叡智が偉業と固有の範例を描き、場所の高低にかかわらず生きている像で飾られている。

なぜなら、すべての精神がみずからを不敬としないように、神の御業と克己とを読み取って深め、さらに、万有の裡に神を見、宇宙とひとつになるつもりだ、

とほくが言えるがためにである。

しかしほくたちは夥しい誤りを犯して、ひとが記述した書籍、

つまり神の書の模倣である死んだ神殿に心惹かれ、

真の教えよりもそちらを好んでいる。

おお、罪よ、争いよ、無知よ、苦悩よ、誤りを気づかせてくれ。

お願いだから、神にかけて、

原初の姿に立ち戻りたい！

### 〈解題〉

このソネットは一種の宣言ともとれる。人間の持つ真正な知の復権のために、現実世界を直接読解せよ、ということである。

第一連はカンパネッラにおなじみの考えである。神は諸々の想念を潜在的に、その恒久な本性として、「自然」と「聖書」に記しているのであるから、哲学と神学は、この二つから營養を引き出せ、というわけである。

自然は神の書（聖書）である。これがカンパネッラの持論であり、その自然が現実世界となるわけで、第四連の「原初の姿に立ち戻りたい！」を考え合わせると、人間が自然から得る教訓を介して、神へ還ることを主張しているわけではない、と推論できる。そうではなくて、神の言動にしたがって公私ともに生きる術を身につけるのが最良なわけである。

## 7 人間としての知見

思慮深い世のひとびとはあたりを見わたせば、

苛政がいかに醜悪であるかわかるであろう、

高価で気品ある美しいマントを羽織っているものの、暴君は人民には苦を強いている。

偽善者に目を転じてみよ、まず神は崇拜、神聖視され、

盛大に祭られているが、みな見せかけである。

詭弁家たちは、

ぼくが称える叡智とは逆の魔法を重んじている始末である。

詭弁家等にはソクラテスが目を光らせ、苛政はカトーが指弾し、

偽善者に対してはキリストが超然と相對している。

けれども不虔や嘘偽や不正を暴くには、

これでも充分ではない。

死を賭してまで思い切ったことをする必要はないが、

ひとびとが分別をわきまえないので、

ぼくたちのほうで悔い改めないのである。

〈解題〉

詩人のこの世へのむなしさが伝わってくるソネットである。カンパネッラは、不虔、嘘偽、不正の三つの悪徳（それらを実行している者たち）の逆である形而上学的かつ神学的な水準での三位一体（具現化された神智）を奉じて、三悪の実相を露呈させようとしている。

8 世界の諸悪の根源

ぼくは三つの極悪を打ち倒すために生まれた、

苛政と詭弁と偽善である。

それで正義の女神がいかに具合よく、

力と知と愛について気づかせてくれたかを悟った。

これら三原理は、偉大な哲学を見出す上で、真理であり最高のものである。

世界であるあなたよ、

三原理はみなが打ち泣きて暮らすこの世の三悪に、  
大鈍おおなたをふるいもする。

三大悪の下では、

飢饉、戦争、疫病、怠惰、欺瞞、不当、色欲、嘘偽、憤懣でさえ、

すべてが屈したままである。

三悪は無知にふさわしい息子である盲目的自己愛に根をはびこらせ、伸長している。

だからぼくは、

その無知を根絶やしにするためにやってきたのである。

#### 〈解題〉

「6」と関連性があり、カンパネッラがみずから救世主的使命感を自覚していることがうかがえる。「三原理」とは、カンパネッラが『形而上学』（第二巻第六章の二）で、三つの「プリマリタ *primatia*」と呼んでいるものに等しい。つまり、Potenza（力）、Sapientia・Scienza（知）、Amore（愛）で、それぞれがカンパネッラの哲学にとって存在の三原理を顕わし、神にあって完全に実現される。世界の諸悪はすべて、苛政、悪の力、詭弁、過てる学、偽善に有利に傾いており、テミス（オウイデウス『変身譚』第一章三三二に記されている、ギリシア神話の正義の女神で、ギリシアに信託を下した、と言われている）が、理性的に、「プリマリタ」という新しい哲学を教授してくれたわけである。結局、カンパネッラの言葉によれば、「知恵を持つひとが多ければ、世は救われ」（知恵の書）第六章（二十四）

關西大學『文學論集』第六十六卷第一号

るわけである。